

青森県埋蔵文化財調査報告書 第634集

林ノ脇遺跡Ⅲ

— 道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2023年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第634集

林ノ脇遺跡Ⅲ

— 道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2023年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和3年度に道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業予定地内に所在する林ノ脇遺跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡は、横浜町林ノ脇地区の海に面した段丘上に位置しており、陸奥湾の向こうに釜臥山を望むことができます。令和元年度の調査では、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の竪穴建物跡等が多数見つかっています。

今回の調査でも溝状土坑を確認し、その構築範囲が北側にも分布していたことがわかりました。また、溝状土坑は近年、横浜町内遺跡の発掘調査で増加しており、注目されます。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました横浜町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和5年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 和田 和 男

例 言

- 1 本報告書は、青森県県土整備部道路課による道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和3年度に発掘調査を実施した横浜町林ノ脇遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、1,500㎡である。
- 2 林ノ脇遺跡の所在地は青森県上北郡横浜町林ノ脇地内、青森県遺跡番号は406018である。
- 3 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 4 本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和3年5月11日～同年6月30日
整理・報告書作成期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日
- 5 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が刊行した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター平山明寿文化財保護主幹、小田川哲彦文化財保護主幹が担当した。発掘調査成果の一部は、ホームページや発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

遺跡・遺構の空中写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
モザイク写真作成	株式会社 シン技術コンサル
遺物の写真撮影	有限会社 無限
- 7 本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。
- 8 測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2011）に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて座標北を示している。
- 9 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号（SV:溝状土坑）に検出順位を示す算用数字を組み合わせた略称を遺構ごとに付した。
- 10 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号（P:土器）と番号を付した。
- 11 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2006年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。土層断面図には水準点を基にした海拔標高を付した。
- 12 各挿図中の遺構実測図の縮尺は、溝状土坑は1/60とし、スケールを示した。路線図・調査区域図・遺構配置図等は適宜縮尺を選択し、各挿図にスケールを示した。
- 13 各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載した。
- 14 遺物実測図の個別番号は、図版ごとに1から遺物番号を付した。
- 15 遺物実測図の縮尺は、土器類1/3を原則とし、各挿図にスケールを示した。
- 16 各遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付しており、縮尺は不同である。
- 17 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 18 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関からご協力、ご指導を得た。

横浜町教育委員会、道の駅よこはま

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・写真図版目次・表目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査及び整理体制	2
第4節 発掘・整理作業経過	3
第2章 遺跡の環境	5
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2節 基本土層	7
第3章 検出遺構と出土遺物	11
第1節 検出遺構	11
第2節 出土遺物	12
第4章 総括	16
第1節 調査地点の様相について	16
第2節 溝状土坑について	16
引用・参考文献.....	17
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1	遺跡位置図	6
図2	基本土層	8
図3	路線図・調査区域図	9
図4	遺構配置図	10
図5	溝状土坑	14
図6	出土遺物	15

写真図版目次

写真1	調査区全景	19
写真2	遺跡空中写真	20
写真3	基本土層	21
写真4	作業状況・溝状土坑（1）	22
写真5	溝状土坑（2）	23
写真6	溝状土坑（3）・出土遺物	24

表目次

表1	林ノ脇遺跡と周辺の遺跡一覧	7
表2	遺構計測表	18
表3	土器観察表	18

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成28年度から青森県県土整備部道路課及び上北地域県民局地域整備部（以下「事業者」）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が継続的に協議・踏査を重ねてきた。用地買収や立木伐採等上物撤去の進捗状況に合わせて、令和3年3月に文化財保護課が試掘調査を行ったところ、遺構（溝状土坑）が確認されたことから、工事施工前の本発掘調査が必要であるとした（青森県教育委員会2022b）。この結果を受け、再度事業者と文化財保護課との間で協議を行ったが遺跡の現状保存が困難であることから、工事優先箇所や他調査事業との調整を経て、令和3年度に林ノ脇遺跡の本発掘調査を実施する計画とし、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。令和3年4月5日付け上県局整備第25号で上北地域県民局長から文化財保護法第94条第1項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が令和3年4月20日付け青教文第119号で工事着手前の本発掘調査（記録保存調査）を通知している。

なお、本調査区に隣接した東側は、国道279号横浜北バイパス道路改築事業による発掘調査を当センターが行っている。令和元年度に南半を調査し（以下「2019年度調査」）、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の竪穴建物跡を多数検出した（青森県教育委員会2021a）。また、令和3年度に北半を調査し（以下「第633集調査」）、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、平安時代の竪穴建物跡や溝跡を検出した（青森県教育委員会2023）。

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

[測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定] 調査区設定・遺構測量に用いた基準点は、調査区の内外に打設されていた工事用基準（4級基準点）を利用した。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として4×4mに設定した。グリッド原点と呼称は2019年度調査と同様とした。即ち、平面直角座標第X系のX=120,200、Y=35,600を原点（I A-1）とし、各グリッドは南から北方向にアルファベットを、西から東方向に算用数字を付して、その南西隅の組み合わせで呼称した。なお、アルファベットは文字1巡による重複を防ぐためローマ数字を併用したほか、Zは使用せず、Yの次はAとした。

[基本土層] 基本土層は、調査区の堆積を把握できるように、主に調査区壁面で確認し、上位から層順に第I層、第II層とローマ数字を付した。土層観察時に色調や混入物により第IV a・第IV b層などと細別した箇所もあるが、遺物取り上げは大別層ごとに行った。

[表土等の調査] 試掘調査や前回の調査成果を踏まえ、表土の除去には重機を用いて掘削の省力化を図った。遺構外出土と判断した遺物は、調査グリッドと出土層等を記録し取り上げた。

[遺構の調査] 遺構の検出は主に基本土層の第IV層上面で行った。検出遺構は、原則として確認順に

番号を付し、略称との組み合わせで呼称した。堆積土層観察用のセクションベルトは、溝状土坑は2分割で設定し、調査を行った。遺構内堆積土には、確認面から順に層序番号を算用数字で付し、ローマ数字の基本土層と区別した。遺構内遺物の出土位置の記録は、ソキア・トプコン製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」によるデジタル測量によった。溝状土坑の平面図および堆積土の断面図は、前述のデジタル測量によって、原則として縮尺 1/20 の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、層位ごとに取り上げた。また、出土状況によっては、遺物微細図の作成も行った。

[写真撮影] 原則として 35mm モノクローム、35mm カラーリバーサル、および約 2,620 万画素のフルサイズデジタル一眼レフカメラを使用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。発掘作業の過程の記録には、約 1,605 万画素のコンパクトデジタルカメラを併用した。また、ラジコンヘリによる遺跡および調査区全体の空中写真撮影を業者委託して実施した。

2 整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] 遺構は、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」で作成した平面図・堆積土層断面図を用いて調整を行った。

[写真類の整理] 35mm モノクロームフィルム及び 35mm カラーリバーサルフィルムは撮影順にアルバムに整理収納し、デジタル写真は撮影内容がわかるファイル名に変更したうえで遺構ごとに整理し、HDD および長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元] 遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名またはグリッド、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。

[報告書掲載遺物の選別と観察・図化] 縄文土器・土師器・陶器については、時期・型式毎に分類した上で、遺構の構築時期を示す資料、時期・型式の特徴を良く表す復元資料を主として選別した。その他の遺物については、器種毎に分類した上で、遺構に伴って出土した資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料を主として選別した。

一定の形状を復元した資料や遺構の構築時期を示す資料については、原則として実測図を作成して形状・特徴等を記録し、観察表を作成した。

[遺物の写真撮影] 業者に委託して行い、質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。

[遺構・遺物のトレース・遺物写真切り抜き・図版作成] 遺構・遺物のトレースは、株式会社 CUBIC 製「遺構実測支援システム」と「遺物実測支援システム」およびアドビ株式会社製 Illustrator を用いて行った。遺構写真の調整と遺物写真の切り抜きは、アドビ株式会社製 Photoshop を用いて行った。図版作成は、アドビ株式会社製 Illustrator を用いて行った。

第3節 調査及び整理体制

1 発掘調査体制

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	葛西 浩一	(令和4年3月31日退職)
	総務GM	油布 恵美	
	調査第二GM	齋藤 岳	
	文化財保護主幹	浅田 智晴	(発掘調査担当者・現総括主幹)

2 整理・報告書作成体制

整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	和田 和男	
	総務GM	油布 恵美	
	調査第二GM	齋藤 岳	
	文化財保護主幹	平山 明寿	(報告書作成担当者)
	文化財保護主幹	小田川哲彦	(報告書作成担当者)

第4節 発掘・整理作業経過

1 発掘作業の経過

林ノ脇遺跡の発掘調査は、令和3年5月11日に開始し、同年6月30日に終了した。発掘作業の経過は以下のとおりである。

- 5月11日 発掘調査器材等の搬入を行い、発掘調査を開始した。発掘調査作業員に作業の説明を行い、調査区周囲をロープで囲う等の環境整備を行った。
- 5月中～下旬 粗掘りを行い、試掘調査のトレンチや遺物を検出した。調査区西端は表土が厚く、調査区東端には近現代の整地盛土が2m近くあったため、重機による表土除去を行った。
- 6月上～中旬 溝状土坑を検出した。また、攪乱痕を検出した(攪乱5・6)。皇紀と目される数字が記された大型の碇子が出土したことや過去の記録写真から、攪乱痕は戦中から戦後の高圧電線用電柱痕と推定した。
- 6月下旬 遺構精査・写真撮影・図面作成を行った。また、22日に遺跡・遺構の空中写真撮影を行った。
- 6月30日 調査が完了し、安全対策を施し、調査区内に打設した測量用基準杭の除去等を行い、全ての作業を終了した。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は令和4年4月1日から令和5年3月31日までの期間で行った。発掘調査では段ボール箱換算で1箱の土器類が出土した。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書は遺構や遺物の数に応じた分量を各々の記載にあてることとした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

- 4月 土器の分類と選別を行った。
- 5月 土器の数量計測を行い、遺構内出土土器から接合作業を行った。
- 6～7月 接合・復元が進んだ土器の選別を行い、採拓と断面実測を行った。
- 8～9月 土器のトレースを行った。
- 10月 遺構図の調整を開始した。
- 11月 図化が完了したものから、各種図版作成作業と共に報告書掲載遺物観察表の作成を行った。また、遺物の写真撮影を行うとともに、報告書の原稿執筆を開始した。
- 12月～2月 原稿・版下が揃ったので報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。印刷業者へ原稿及び版下を入稿した。校正、及び出土遺物・記録類の整理を行った。
- 3月15日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。

(平山)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

林ノ脇遺跡は、陸奥湾に面した下北半島頸部のほぼ中央、JR大湊線陸奥横浜駅から南東に800m程の、陸奥湾に注ぐ三保川右岸の標高約25mの段丘上に位置する。遺跡の所在する横浜町は、菜の花と海産物のなまこが著名で、町を南北に貫く国道279号線の沿線は、国土交通省の日本風景街道「黄花草の東むつ湾ルート」にも選定されている。町内には、国指定の重要無形民俗文化財・記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（選択）である「下北の能舞」や県無形民俗文化財「横浜町の獅子舞」・「横浜町の神楽」、県天然記念物「横浜町のゲンジボタルおよびその生息地」、町史跡牛ノ沢遺跡（町ホームページでは牛ノ沢館跡）等が所在する。町西側の海岸沿いに集落が点在し^(※1)、集落を繋ぐように国道279号線が縦走する。国道279号線は近世街道の田名部通をほぼ踏襲しており^(※2)、江戸時代からほぼ変わらない景観である。ただし、沿岸の松林は、明治以降の植林によるものである。町の東側、海岸から離れた丘陵地に展開する広い畑地・牧草地は、大正から戦後の開拓によるものが多い。歴史的環境は第633集調査の報告書でも記載しているため（青森県教育委員会2023）、ここでは、近世以降の概略を述べる。

当地は、近世は盛岡藩の北郡の野辺地通に属した「横濱村」であり、陸運や海運の要所として栄えた。村内には前述のように田名部通が通り、村内には駅場が設けられていたほか、下北半島を東西に横断しての太平洋側（現在の六ヶ所村の泊）まで続く道路が存在し^(※3)、道路の結節点でもあった。また、三保川の河口に横濱浦（湊）が設けられていた。絵図では下北方面へ向かう航路が描かれ^(※4)、町内の寺院には笏谷石製の墓石が散見されるなど、北前船が寄港していたことが推測される。

「横濱村」は、明治2年（1869）に九戸県、次いで斗南藩、更に明治4年（1871）に青森県^(※5)の所属となる。明治5年（1872）の大区小区制により、北郡七大区一小区の一部となったが、明治22年（1889）の町村制施行により単独の横浜村となり、昭和31年（1956）の町制施行により横浜町となる。

町内には32の遺跡が所在する^(※6)。図1に本遺跡を含む29遺跡を示した。詳細は2019年度調査（青森県教育委員会2021a）や、周辺の発掘調査（青森県教育委員会2021b・2022a）報告書に譲るが、陸奥湾沿いの段丘上に位置し、弥生時代や中世（城館）、近世（製塩遺跡^(※7)）の遺跡が目立つ。

林ノ脇遺跡は、昭和46年に発見された遺跡である（青森県教育委員会1973）。過去に文化財保護課による試掘調査（青森県教育委員会1994・2019・2020）や、当センターによる本発掘調査（青森県教育委員会2021a）を実施しており、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の竪穴建物跡を多数検出している。

今回の調査区は、2019年度調査区の北西、道の駅よこはまの東に隣接しており、東西辺15m～35m・南北辺45m程の台形状をしている。標高は25m前後で、調査区内はほぼ平坦であるが、東から西に向かって緩やかに傾斜している。調査開始前の土地利用状況は畑地であった。

（※1）吹越・百目木・檜木・大豆田・鶏沢・有畑・浜田は、近世までは横濱村（本村）の支村であった（南部叢書刊行会1929・青森県史編さん近世部会2003ほか）。

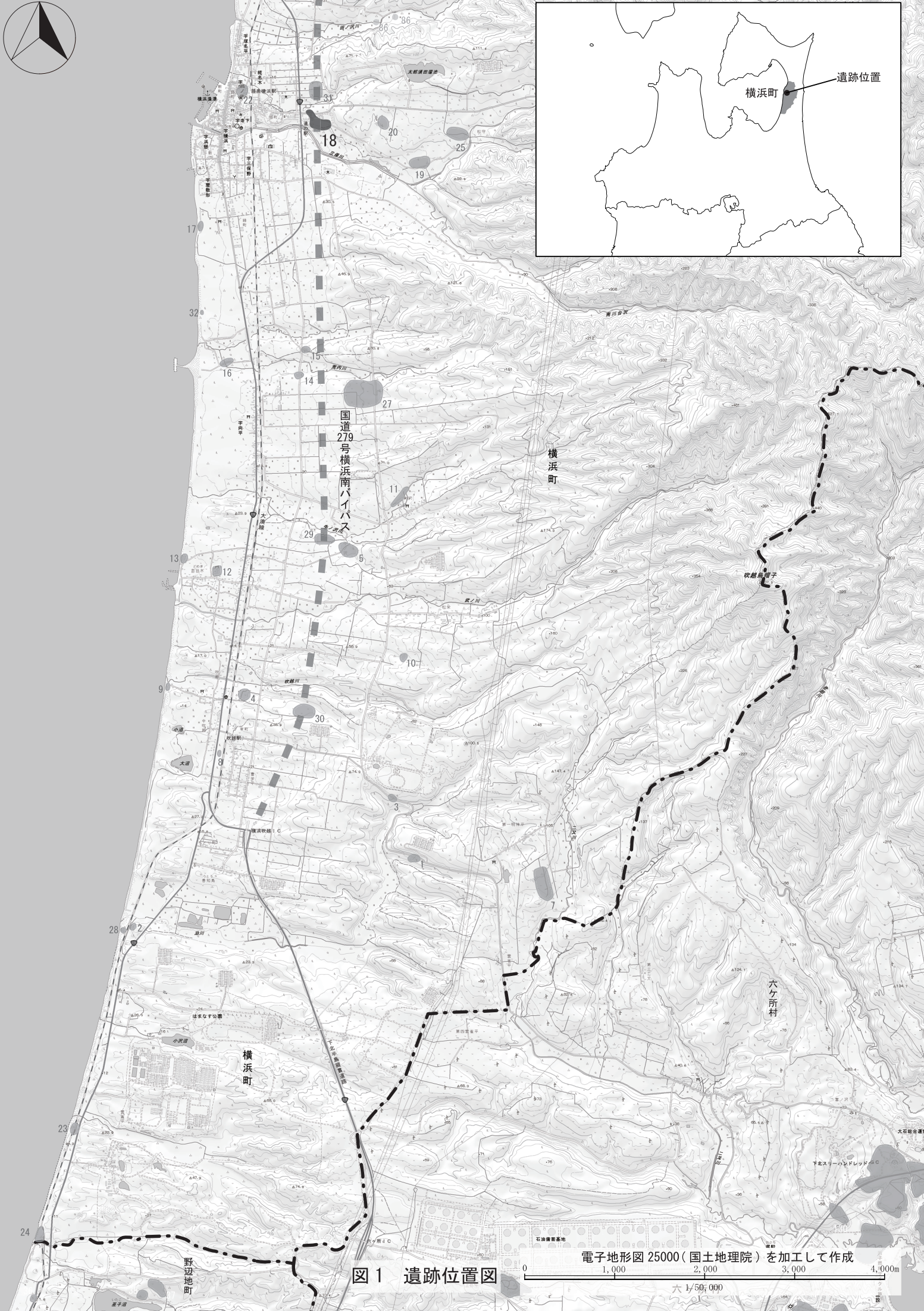
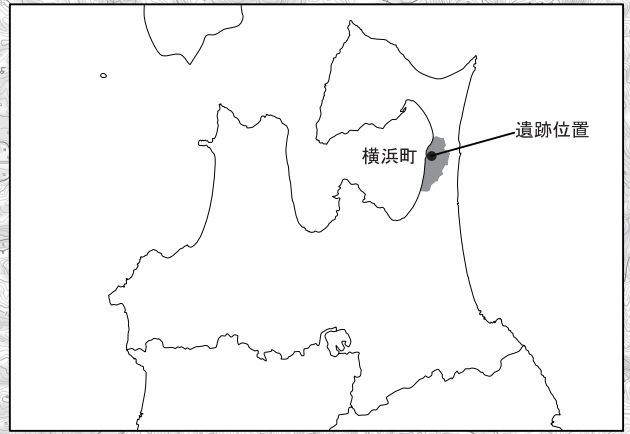
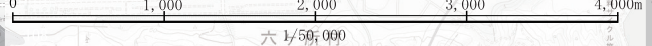


図1 遺跡位置図

電子地形図 25000 (国土地理院) を加工して作成



六 1/50,000

- (※2) 野辺地(有戸)～横浜(本村)までは海岸を通行していた(青森県教育委員会1986)。
- (※3) 『新撰陸奥國誌』(青森県文化財保護協会1965)巻第六十に収録された「横浜村」の項目には、山川の「北川台山」中に、「この山を越て泊村に通ず難路三里にして遠し」とある。現在の県道179号線 泊むつ横浜停車場線に該当する道路と推測される。
- (※4) 『南部領内総絵図』・『南部領元禄国絵図控』等(青森県史編さん近世部会2001・2003)。
- (※5) 明治2年に九戸県は八戸県、三戸県と改称し、三戸県を分離して斗南藩が設置された。斗南藩は明治4年に斗南県と改称した後に弘前県に統合され、弘前県は更に青森県と改称された。(青森県史編さん近現代部会2002)
- (※6) 遺跡地図には登録されていないが、吹越で細石刃・剥片等が、浜懸で縄文時代後期中葉の壺が採取されている(角鹿・渡辺1980)。
- (※7) 『田名部道』(青森県教育委員会1986)には「塩竈に擬せられる遺構⑥が存在する。」とあるが、現在、見つけられない。

表1 林ノ脇遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	縄文						時代					種別	備考	
		草	早	前	中	後	晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世			近世
406001	とまり川(1)遺跡					○								散布地	
406002	とまり川(2)遺跡						○							散布地	
406003	雲雀平(1)遺跡				○		○							散布地	
406004	明神平遺跡						○	○						散布地	
406005	牛ノ沢遺跡										○			城館跡	町史跡
406007	烏帽子平遺跡					○	○							散布地	
406008	中吹越遺跡									○				散布地	
406009	吹越(1)遺跡									○		○		貝塚・製塩遺跡	
406010	松菜遺跡													散布地	縄文時代
406011	向沢遺跡													散布地	縄文時代
406012	百目木(1)遺跡							○			○			散布地	
406013	百目木(2)遺跡										○	○		散布地・生産遺跡	
406014	荒内川(1)遺跡													散布地	
406015	荒内川(2)遺跡					○	○							散布地	
406016	荒内川(3)遺跡										○			散布地	
406017	横浜遺跡										○			散布地	
406018	林ノ脇遺跡		●		●	●	●	●		○	●	●		散布地・集落跡	
406019	松守遺跡						○							散布地	
406020	太郎須田遺跡					○								集落跡	
406022	横浜館										○			城館跡	
406023	雲雀平(2)遺跡											○		生産遺跡	
406024	雲雀平(3)遺跡									○		○		生産遺跡	
406025	松守(2)遺跡													散布地	縄文時代
406027	モダシ平遺跡					●	●	○		○				散布地	
406028	雲雀平(4)遺跡									○		○		散布地・生産遺跡	
406029	百目木(3)遺跡							●						集落跡・狩猟場	縄文時代
406030	吹越(2)遺跡													集落跡・狩猟場	縄文時代
406031	林ノ後遺跡									○				集落跡	縄文時代
406032	上イタヤノ木遺跡										○			散布地	

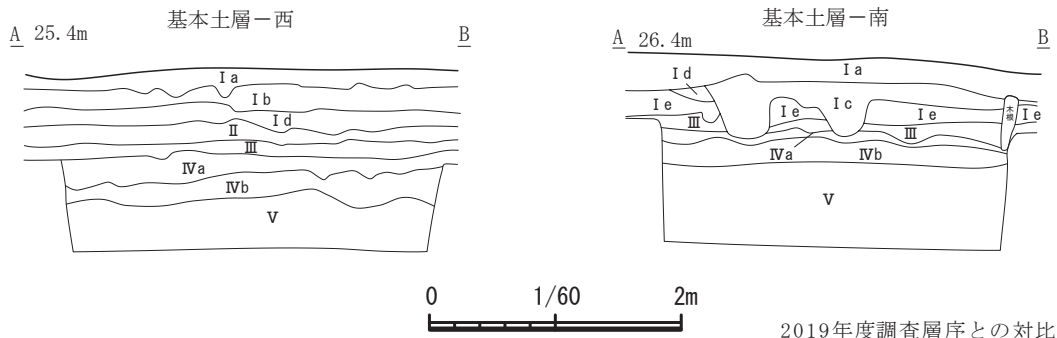
●：青森県教育委員会が調査した遺跡で、調査結果から加筆した時代。

第2節 基本土層

遺跡が所在する下北半島頸部中央は、山地(吹越山地)が南北に連なり、その周辺に丘陵地が広がる。丘陵地の西側には、陸奥湾に沿って段丘(中位段丘)が分布する。段丘は標高等から上位面と下位面とに細分される。陸奥湾岸は大半が砂浜海岸である。林ノ脇遺跡は、三保川の北側の段丘下位面に立地する。三保川とは比高15m程の急崖となっている。地形・地質の図等は、2019年度調査(青森県教育委員会2021a)や周辺遺跡の調査事例(青森県教育委員会2021b・2022a)を参照されたい。

調査区の標高は25m前後で、ほぼ平坦であるが、東から西に向かって緩やかな傾斜がある。調査

開始前の土地利用状況は畑で、耕作に伴うと推測される削平と造成のための盛土が広範囲に認められる。基本土層は、調査区西端・南端の2箇所で作図した。層番号は、2019年度調査を基本的に引き継ぐものの、一部追加ないし削除した部分もある。



2019年度調査層序との対比

基本土層

第I層 近現代の人為的土地改変層

- 第I a層 10YR3/2 黒褐色土 現表土(耕作土)、しまりなく、乾燥時亀裂。
- 第I b層 10YR2/3 黒褐色土 黒色炭化物粒(φ~5mm)2%混合、しまり強く、調査区西側を中心に堆積。造成等に伴う整地層。
- 第I c層 10YR2/3 黒褐色土 黒色炭化物粒(φ~20mm)5%混合、調査区東側を中心に堆積。造成等に伴う整地層。
- 第I d層 10YR2/1 黒色土 旧耕作土、しまりなく乾燥時亀裂、調査区北側付近で消滅。
- 第I e層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm)10%混合、第II層を基本とした耕作土(掘り上げ土)。第I c層より緻密。
- 第II層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~5mm)2%混合、黒ボク土層、試掘トレンチの東側では欠層。
- 第III層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~50mm)30%混合、漸移層。
- 第IVa層 10YR5/8 黄褐色シルト質粘土 しまりあり、ソフトローム上部層。
- 第IVb層 10YR6/6 明黄褐色粘土 しまりあり(第V層より弱い)、ソフトローム下部層。
- 第V層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 マンガン粒(φ~3mm)5%混合、西側より東側に混合量多。上部明るく下部暗い、ハードローム層。

2019 2021

- I { I a
- I { I b
- I { I c
- I { I d
- I { I e
- III → II
- IV → III
- V-1 → IVa
- V-2 → IVb
- V-3 → V

※2019年度調査時の第II層には、灰白色粘土塊混入とあり、造成土の可能性はあるが、本第I b層と対応するものかは不明。

図2 基本土層

- 第I層：黒～黒褐色土 耕作土や造成のための盛土といった近現代の土地改変層。a～eの5層に細分される。盛土層のI b層は調査区西半、I c層は調査区東半を中心に堆積する。
- 第II層：黒褐色土 黒ボク土層。調査区東半では欠層する。2019年度調査の第III層に該当する。
- 第III層：暗褐色土 漸移層。2019年度調査の第IV層に該当する。
- 第IV層：黄褐色～明黄褐色粘土 ソフトローム層。しまり具合によってa～bの2層に細分される。しまりのある上層が2019年度調査の第V-1層、しまりの弱い下層が第V-2層に該当する。
- 第V層：にぶい黄褐色粘土 ハードローム層。マンガン粒を多く含み、硬くしまる。2019年度調査の第V-3層に相当する。

(平山)

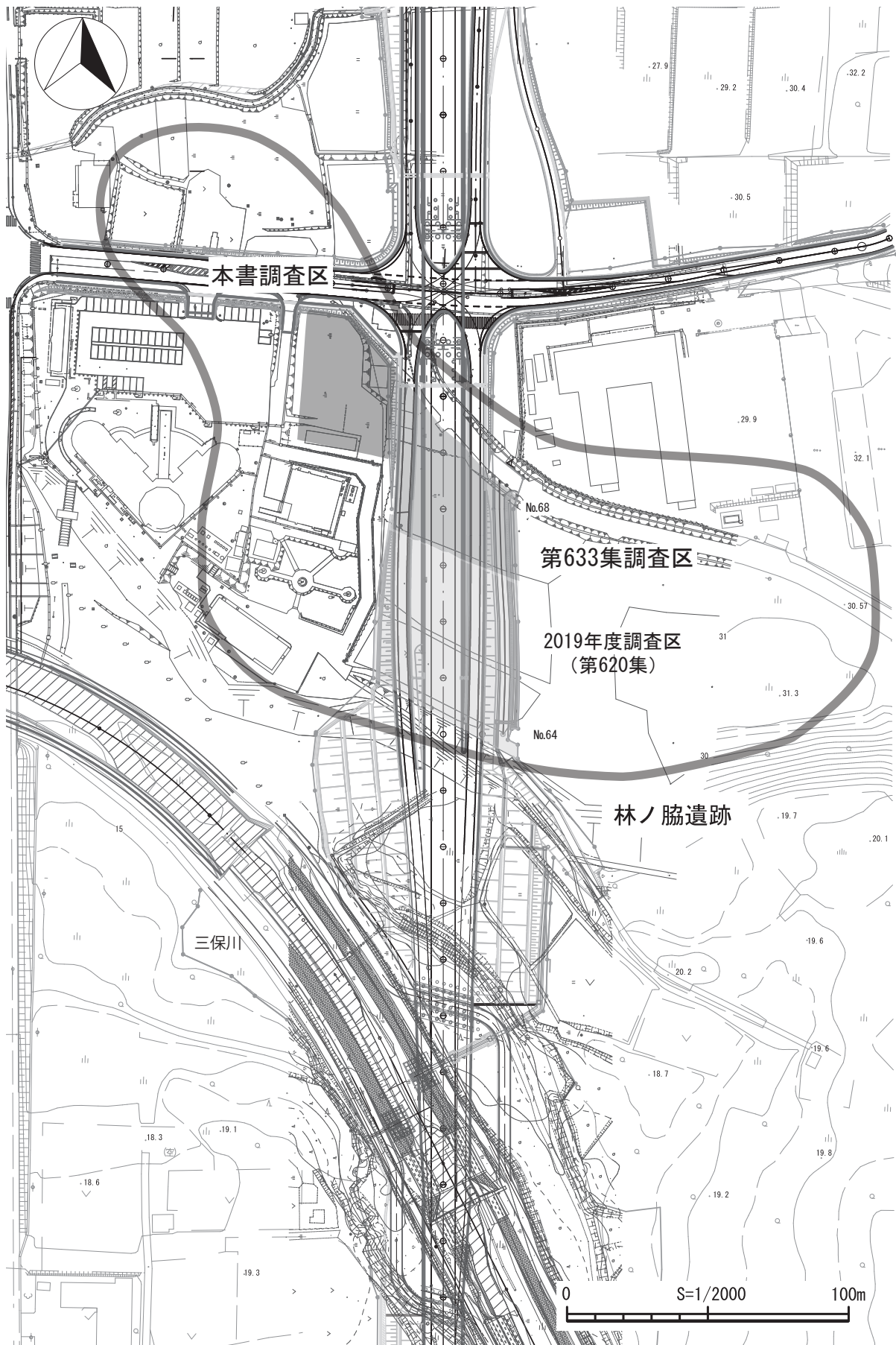


図3 路線図・調査区域図

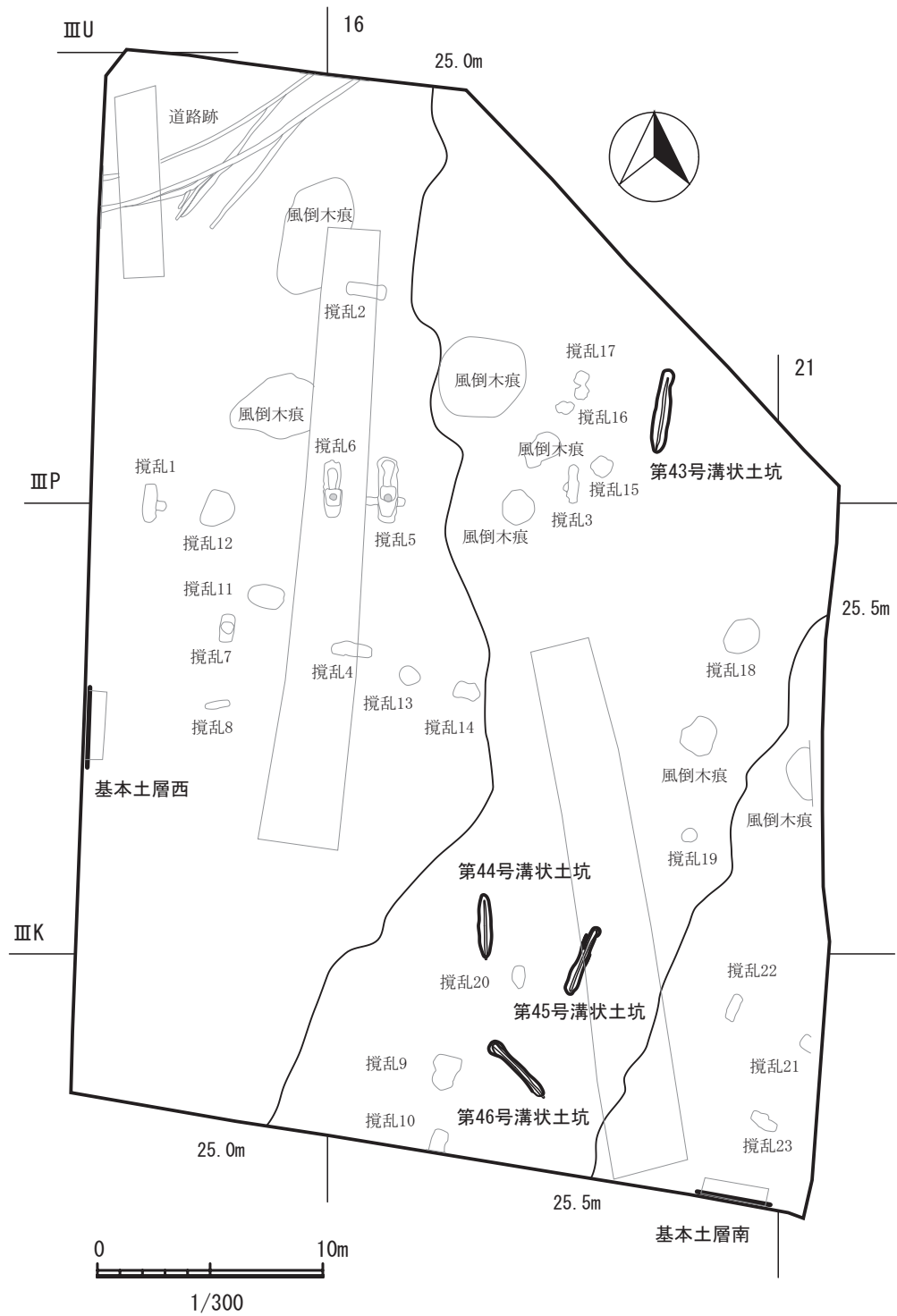


図4 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

本事業の調査区は、第633集調査区の西側に接している。調査前の土地利用状況は畑地で、それ以前は電力施設関連の用地として使われていたようである。表土撤去後、標高24.6～25.8m地点の第IV層面に縄文時代の遺構と多数の攪乱坑を検出した。

縄文時代の遺構は、溝状土坑4基で、重複もなく散漫に分布する。各遺構番号は2019年度調査の番号から継続して付している。

出土遺物は少なく、上記の遺構堆積土中と遺構外から縄文土器が数点出土しているほか、平安時代の土師器と近世陶器も数点出土している。以下に、各遺構と出土遺物について記述する。

第1節 検出遺構

第43号溝状土坑（SV43）（図5・6、写真4・6）

[位置・確認] III P・III Q - 19グリッドに位置する。標高約25.2mの第IV層面で検出した。

[重複] なし

[形状・規模] 平面形状は葉巻状の長楕円である。規模は開口部長軸（長さ）3.68m、短軸（幅）0.68m、底面長軸3.27m、底面短軸0.12m、深さは1.56mで底面は概ね平坦である。長軸断面形は概ね箱形で、短軸断面形は底面から直線的に開くV字状である。長軸方向はN - 8.8° - Eである。

[堆積土] 周壁の崩落を伴う自然堆積で、6層に分けられる。

[出土遺物] 堆積土第1層から、胎土に繊維を含む縄文時代前期に比定される土器細片が1点出土している。自然流入したものと思われる（図6-1）。細片で文様不明なため詳細ではないが、円筒下層d式期の土器の可能性はある。

[小結] 本遺構の帰属時を出土土器から縄文時代前期に比定することは考えづらい。これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第44号溝状土坑（SV44）（図5、写真5）

[位置・確認] III K - 17グリッドに位置する。標高約25.1mの第IV層面で検出した。

[重複] なし

[形状・規模] 平面形状は両端部がやや尖る長楕円である。規模は開口部長軸（長さ）2.77m、短軸（幅）0.56m、底面長軸2.64m、底面短軸0.10m、深さは1.15mで底面は概ね平坦である。長軸断面形は概ね箱形だが、南側底面付近が緩くオーバーハングする。短軸断面形は底面からV字状に開き、中位で外側に緩く開く、緩いY字状である。長軸方向はN - 1.9° - W - である。

[堆積土] 周壁の崩落を伴う自然堆積で、9層に分けられる。

[小結] これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第45号溝状土坑（SV45）、（図5・6、写真5・6）

[位置・確認] ⅢJ・ⅢK-18グリッドに位置する。標高約25.3mの第Ⅳ層面で検出した。2021年の文化財保護課による試掘調査で確認された遺構である（青森県教育委員会2022b）。

[重複] なし

[形状・規模] 本遺構北側上部は試掘トレンチで削平されたが、平面形状は葉巻状の長楕円であったと思われる。規模は開口部長軸（長さ）3.19m、短軸（幅）0.51m、底面長軸2.95m、底面短軸0.16m、深さは1.12mで底面は概ね平坦である。長軸断面形は概ね箱形で、短軸断面形はやや屈曲はあるもののV字状である。長軸方向はN-22.3°-Eである。

[堆積土] 周壁の崩落を伴う自然堆積で、7層に分けられる。

[出土遺物] 堆積土第1層から、接合する縄文土器片2点、26.2gが出土した。胎土に砂粒を多く含みLR縄文が施文される（図6-2）。

[小結] 出土した2点の縄文土器については、本遺構調査時点では自然流入と捉えたが、近接する第46号溝状土坑からの土器出土状況から、第1層だけ人為埋土の可能性もある。本遺構の帰属時期は、出土土器片から縄文時代中期以降に比定される。

第46号溝状土坑（SV46）（図5・6、写真6）

[位置・確認] ⅢI-17・18グリッドに位置する。標高約25.2～25.4mの第Ⅳ層面で検出した。

[重複] 一部後世の攪乱坑と重複する。

[形状・規模] 本遺構南東端上部は攪乱坑で削平されているが、平面形状は両端部が広がるダンベル状の長楕円であったと思われる。規模は開口部長軸（長さ）3.22m、短軸（幅）0.61m、底面長軸3.42m、底面短軸0.13m、深さは1.11mで、底面は平坦である。長軸断面形は両端部がオーバーハングするフラスコ状で、短軸断面形は底面から直線的に立ち上がる筒状である。長軸方向はN-45.0°-Wである。

[堆積土] 周壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[出土遺物] 堆積土第1層から、縄文土器片13点、341.8gが出土した。これらの縄文土器は、4個体分の破片であり、本遺構の開口部両端、特に北側端部に多く散在して出土している。各出土土器の詳細については、遺構外出土土器とまとめて次節および観察表で記述する。

[小結] 本遺構の帰属時期は、出土土器片から縄文時代中期以降に比定される。土器の出土位置が堆積土の上位であることから、その時期にはほぼ埋没している。

（小田川）

第2節 出土遺物

土器類（図6-1～16、写真6）

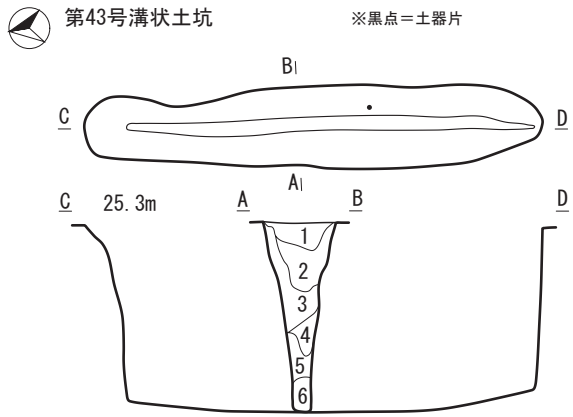
遺構内および遺構外から土器類25点が出土し、それらほぼすべてを図示した。石器類の出土はない。いずれも破片および細片で、遺構内では第43・45・46号溝状土坑の堆積土内から縄文土器が、遺構外からは縄文土器、土師器、陶器が出土している。

1は第43号溝状土坑から出土した。細片で器面が摩耗しており、文様の有無は不明。胎土に多量の繊維痕がみられることから、縄文時代前期の円筒下層d式期の土器の可能性はある。2は第45号

溝状土坑から出土した。胎土に砂粒を多く混入する。文様はLRが施文されており、内面はナデ整形されている。縄文時代中期以降に比定される。3～11は第46号溝状土坑から出土した。3は口縁部、4は台付き底部で共に無文である。内面はナデ整形され胎土に砂粒を含む。5～8はRLが施文され、内面はナデ整形される。胎土には砂粒を含む。施文文様や土器の色調、厚さから同一個体の可能性がある。縄文時代中期以降に比定される。9～11はLRが施文され、内面は工具痕がみられ胎土には砂粒を含む。土器は堅緻で文様と色調等から同一個体の可能性がある。

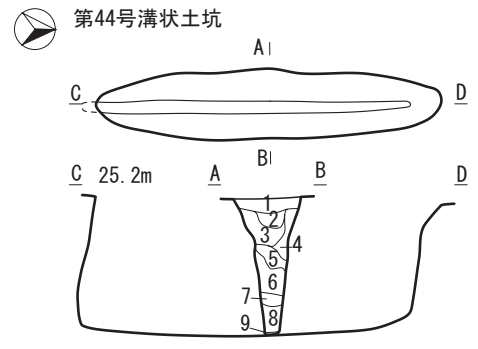
12～16は遺構外出土である。12は細片で器面が摩耗しているため詳細にないが無文の可能性があり。胎土には細砂のほか、微細な石英と海綿骨針がみられる。13は幅の狭い条痕文が施されるもので、胎土には石英粒を含む砂粒を含む。14はLRが施文される細片である。12と13は縄文時代早期前半の土器の可能性があり。14は縄文時代中期以降の土器の可能性があり。15は土師器である。胴部片で、貫通孔が2ヶ所認められることから甑の可能性があり。器面調整は、内面はナデ・外面はミガキが施されている。胎土に砂粒を含む。甑の可能性がありのものは、第633集調査区の溝跡（SD18）からも出土しており（青森県教育委員会2023）、10世紀後半の年代が推測されるが、類例が少なく判然としない。16は陶器である。皿の底部で、底径は（13.8cm）と推定される。平底で、胴部は底部からやや内湾しながら立ち上がる。内外面に灰白色の長石釉が施されているが、底部付近は露胎となっており、沈線が1条巡る。器面調整は、内外面はロクロ形成、底部はヘラケズリと思われる。産地不明および年代は判然としないが、17世紀後葉以降と推測される。

（平山・小田川）



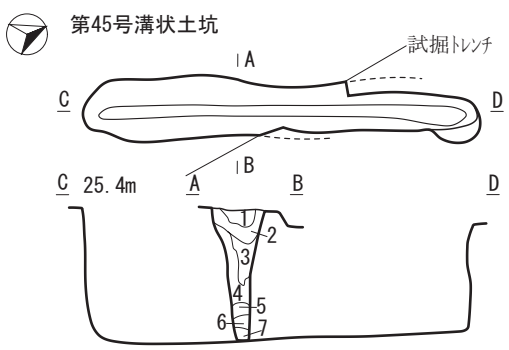
第43号溝状土坑 (SV43)

第1層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~5mm) 2%混合、凹地への自然流入土。
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~150mm) 5%混合、周壁崩落土塊混入。
 第3層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~100mm) 20%混合、崩落土、掘り上げ土混入。
 第4層 10YR3/4 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~7mm) 40%混合、掘り上げ土流入。
 第5層 10YR4/4 褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~100mm) 40%混合、掘り上げ土流入。
 第6層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~100mm) 20%混合、初期堆積土に崩落土混入。



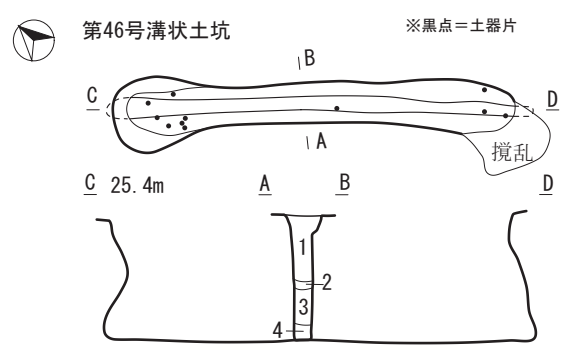
第44号溝状土坑 (SV44)

第1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 20%混合、自然流入土に周壁崩落土混入。
 第2層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~1mm) 2%混合、凹地への自然流入土。
 第3層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~50mm) 20%混合、周壁崩落土混入。
 第4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~30mm) 30%混合、周壁崩落土混入。
 第5層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~10mm) 10%混合、自然流入土。
 第6層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~30mm) 40%混合、掘り上げ土。
 第7層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 10%混合、自然流入土。
 第8層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~20mm) 10%混合、自然流入土。
 第9層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~1mm)



第45号溝状土坑 (SV45)

第1層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~5mm) 2%混合、凹地への自然流入土。
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~50mm) 7%混合、自然流入土に周壁崩落土混入。
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 5%混合、自然流入土に周壁崩落土混入。
 第4層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~50mm) 40%混合、掘り上げ土流入、上部周壁崩落土混入。
 第5層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 3%混合、自然流入土。
 第6層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~30mm) 30%混合、周壁崩落土及び掘り上げ土。
 第7層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~5mm) 1%混合、



第46号溝状土坑 (SV46)

第1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 10%混合、掘り上げ土主体、土器片多数出土。均質で廃棄埋め戻し土の可能性有。
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 30%混合、周壁崩落土、自然流入土混合。
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ~10mm) 10%混合、掘り上げ土主体、均質、埋土が不確実。
 第4層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ~40mm) 20%混合、初期堆積土に崩落土混入。

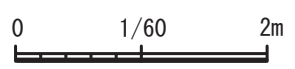


図5 溝状土坑

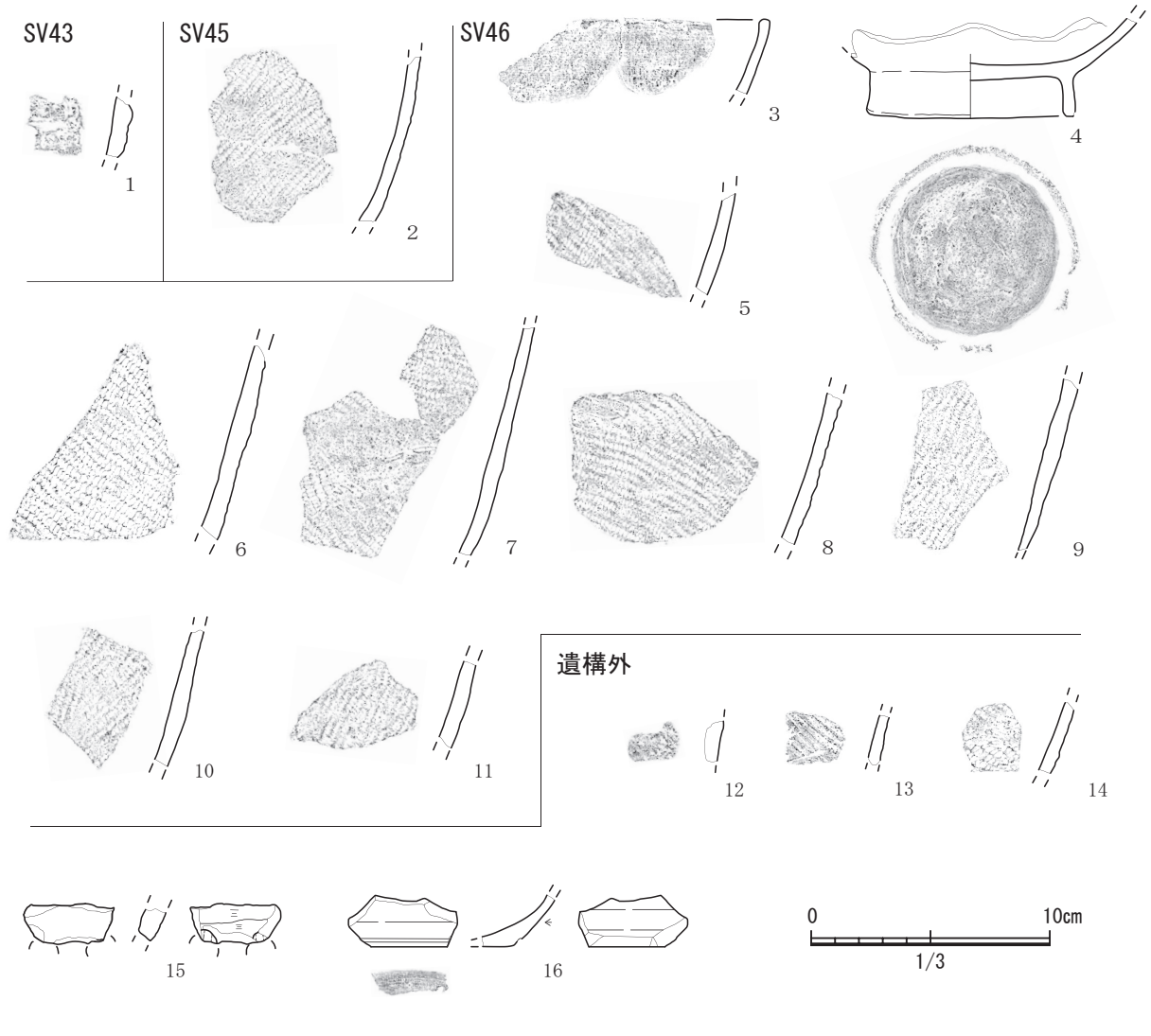


図6 出土遺物

第4章 総括

第1節 調査地点の様相について

今回の調査区は2019年度調査区の北西および第633集調査区の西に位置する。調査の結果、縄文時代の溝状土坑を検出し、縄文時代の土器・平安時代の土師器・近世以降の陶器が出土した。

遺構・遺物の検出・出土状況から、縄文時代の狩猟場は三保川に面した遺跡南端のみでなく、遺跡北半にも広がっていたことが判明した。また、平安時代以降の土地利用痕跡が希薄であることを確認した。特に、2019年度調査区および第633集調査区で検出した平安時代の集落域が本調査区まで広がっていないことが明らかになった。(平山)

第2節 溝状土坑について

2019年度の発掘調査で検出された42基の溝状土坑のうち8基から遺物が出土し、そのうち5基から土器(早期前葉)が総重量373.1g出土した。これらについては、溝状土坑内からの出土遺物が埋没過程ですべて自然流入した遺物で、遺構の時期決定に欠くため遺構外遺物として記載され、帰属時期不明とされたが、遺構外出土土器に縄文時代中期から後期および晩期の土器があることと、福田の論文(福田2018)を引用して、「形態も同様であることから、少数ながら縄文時代中期後葉～後期前葉(十腰内Ⅰ式)の土器片が(遺構外から)出土していることから、近い時期に属すると推察される」と記述している(青森県教育委員会2021a)。

本調査で検出した4基の溝状土坑のうち3基の堆積土中からも土器片が出土している。第43号溝状土坑から胎土に繊維を混入する縄文時代前期頃の土器片が1点、第45号溝状土坑から縄文時代中期以降に比定される土器片が1点、第46号溝状土坑からは粗製土器片で詳細な時期の特定にまで至らないが、およそ縄文時代中期中葉以降と判断される土器片が13点(341.8g)出土している。

これまで溝状土坑については多数論じられており、それらと同様に、その機能・形態・配置・構築帰属時期に関しては大きく逸脱するものではない。また、溝状土坑内出土遺物についてもすべて遺構廃絶後の埋没過程で疑いなく自然流入したものと評価されている。本調査例も自然流入したものと判断しているが、第46号出土土器については本遺構の周辺に13点もの破片が混入する要因が全く見受けられないにも関わらず、複数の個体破片がほぼ同一地点から出土している。

溝状土坑内から数点(1～2点)の遺物(土器)出土は、複合遺跡や遺構検出数の多い遺跡の場合、何らかの過程で自然流入したものとして、注視されるものでは無くなっている。しかしながら、複数個体が出土する例は、県内で最多の検出をみる六ヶ所村発茶沢遺跡でも、431基のうち2基だけである(青森県教育委員会1982)。本第46号溝状土坑出土の土器について、人的混入(土器片の廃棄、土砂を伴う混入)とする根拠は無いが、複数の個体破片がほぼ同一レベルで出土していることに注目したい。(小田川)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1973 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書』
青森県埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 青森県教育委員会 1982 『発茶沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第67集
- 青森県教育委員会 1986 『田名部道』青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1994 『青森県遺跡詳細分布調査報告書VI』青森県埋蔵文化財調査報告書 第165集
- 青森県教育委員会 2019 『青森県遺跡詳細分布調査報告書31』青森県埋蔵文化財調査報告書 第605集
- 青森県教育委員会 2020 『青森県遺跡詳細分布調査報告書32』青森県埋蔵文化財調査報告書 第615集
- 青森県教育委員会 2021a 『林ノ脇遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第620集
- 青森県教育委員会 2021b 『百目木（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第622集
- 青森県教育委員会 2022a 『吹越（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第628集
- 青森県教育委員会 2022b 『青森県遺跡詳細分布調査報告書34』青森県埋蔵文化財調査報告書 第632集
- 青森県教育委員会 2023 『林ノ脇遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第633集
- 青森県史編さん近現代部会 2002 『青森県史 資料編 近現代1』
- 青森県史編さん近世部会 2001 『青森県史 資料編 近世1』
- 青森県史編さん近世部会 2003 『青森県史 資料編 近世4』
- 青森県史編さん考古部会 2005 『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』
- 青森県文化財保護協会 1965 『新撰陸奥国誌』第四巻 みちのく双書第18集
- 角鹿扇三・渡辺兼庸 1980 『角鹿扇三 蒐集考古学資料集』
- 南部叢書刊行会 1929 「邦内郷村志 卷五」『南部叢書』第5冊
- 福田友之・工藤清泰・木村浩一 1986 「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日月市館・横浜町牛ノ沢館跡
等発見の陶磁資料」『弘前大学考古学研究』第3号 弘前大
学考古学研究会
- 福田友之 2018 『東北北部先史文化の考古学』同成社

表2 遺構計測表

図番号	遺構名	略号	位置	主軸方向	長軸(開口部) (m)	短軸(開口部) (m)	長軸(底面) (m)	短軸(底面) (m)	深さ (m)	堆積土	備考
図5	第43号溝状土坑	SV43	III P・III Q-19	N-8.8-E	3.68	0.68	3.27	0.12	1.56	6層:自然堆積 胎土に繊維混入、縄文前期に比定。	堆積土(覆土)第1層中から縄文土器1点(5.1g)出土。
図5	第44号溝状土坑	SV44	III K-17	N-1.9-W	2.77	0.56	2.64	0.10	1.15	9層:自然堆積	
図5	第45号溝状土坑	SV45	III J・III K-18	N-22.3-E	3.19	0.51	2.95	0.16	1.12	7層:自然堆積	主軸方向下端計測。堆積土(覆土)第1層中から縄文土器2点(26.2g)出土。胎土に砂粒混入、縄文中期以降に比定。
図5	第46号溝状土坑	SV46	III I-17・18	N-45.0-W	3.22	0.61	3.42	0.13	1.11	4層:自然堆積 (1層:埋土の可能性有)	堆積土(覆土)第1層中から縄文土器13点(341.8g)出土。 縄文中期以降に比定。

表3 土器観察表

図番号	出土位置	グリッド	層位	P番	種別	器種	部位	重量(g)	外面文様	内面調整	胎土	備考
図6-1	第43号溝状土坑	III P・Q-19	1	P-1	縄文	深鉢形	胴部	5.1	不明	不明	繊維混入	器面摩耗、円筒下層d式期の可能性有
図6-2	第45号溝状土坑	III J・K-18	1	P-1・2	縄文	深鉢形	胴部	26.2	L R (横)	ナデ	砂粒(多)	縄文時代中期以降
図6-3	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-3・5	縄文	深鉢形	口縁部	16.8	無文	ナデ	砂粒	口唇部平坦、縄文時代中期以降
図6-4	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-1	縄文	台付鉢	底部	124.7	無文	ナデ	細砂粒(石英粒)	縄文時代中期以降
図6-5	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-11	縄文	深鉢形	胴部	13.9	R L (横)	ナデ	細砂粒	縄文時代中期以降
図6-6	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-9	縄文	深鉢形	胴部	46.6	R L (横)	ナデ	細砂粒	縄文時代中期以降
図6-7	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-6・8	縄文	深鉢形	胴部	38.7	R L (横)	ナデ	細砂粒	縄文時代中期以降
図6-8	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-2	縄文	深鉢形	胴部	39.8	R L (横)	ナデ	細砂粒	縄文時代中期以降
図6-9	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-10	縄文	深鉢形	胴部	23.9	L R (横)	工具痕	細砂粒、堅緻	縄文時代中期以降
図6-10	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-7	縄文	深鉢形	胴部	20.2	L R (横)	工具痕	細砂粒、堅緻	縄文時代中期以降
図6-11	第46号溝状土坑	III I-17・18	1	P-4	縄文	深鉢形	胴部	15.9	L R (横)	工具痕	細砂粒、堅緻	縄文時代中期以降
図6-12	風倒木痕	-	堆積土	P-3	縄文	深鉢形	胴部	3.0	無文	-	微細石英、海綿骨針	縄文時代早期前葉
図6-13	攪乱	-	堆積土	P-4	縄文	深鉢形	胴部	4.6	条痕	ナデ	細砂粒(石英粒)	縄文時代早期前葉
図6-14	-	-	I	P-2	縄文	深鉢形	胴部	5.6	L R (横)	工具痕	細砂粒	縄文時代中期以降
図6-15	-	-	I	-	土師器	甗?	胴部	6.9	ミガキ?	ナデ	細砂粒	貫通孔2ヶ所、10世紀後半
図6-16	-	-	I	-	陶器	皿	底部	13.0	ロクロ	ロクロ	瓷	底径13.8cm、17世紀後葉以降



調査区全景（上が北・2019年度と第633集調査区の合成）

写真1 調査区全景

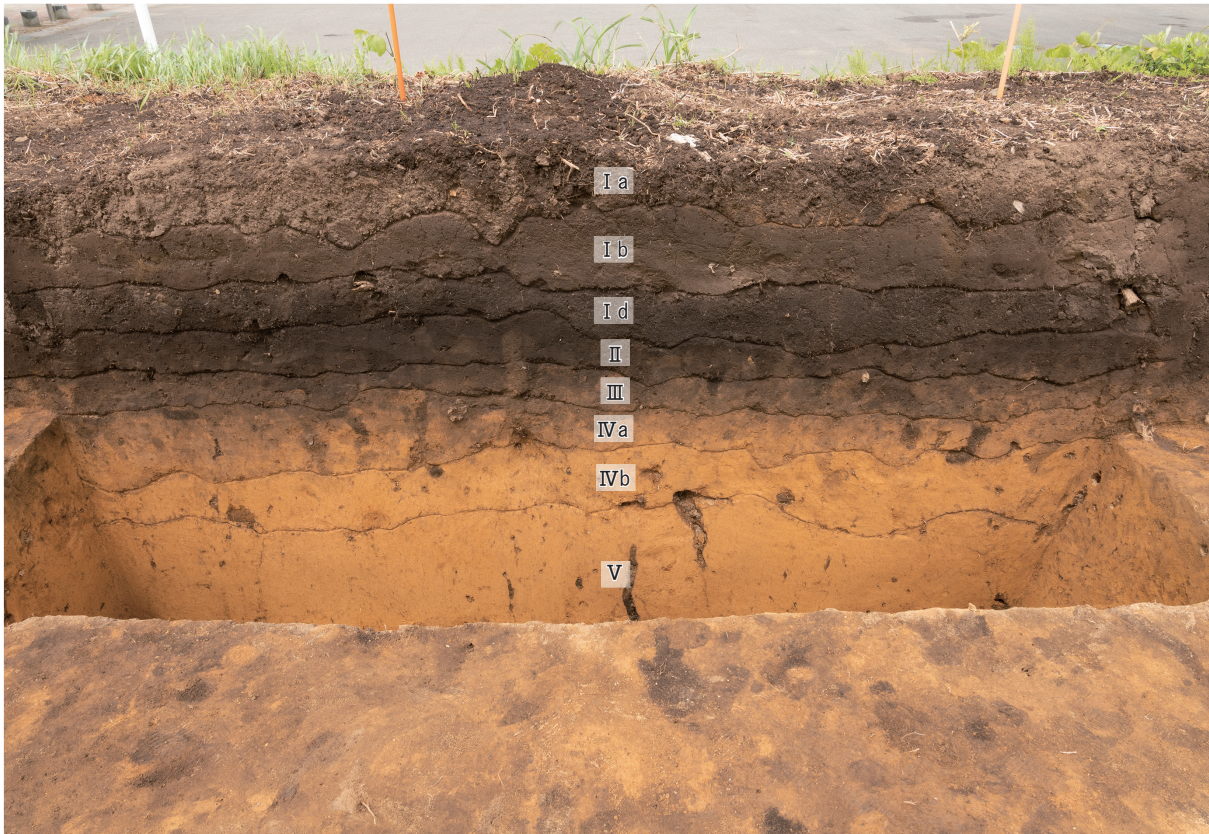


遺跡空中写真(南東→)



調査区完掘(南→)

写真2 遺跡空中写真



基本土層-西 (東→)



基本土層-南 (北→)

写真3 基本土層



作業状況(南東→)



作業状況(北西→)



作業状況(南東→)



第43号溝状土坑 精査状況(北→)

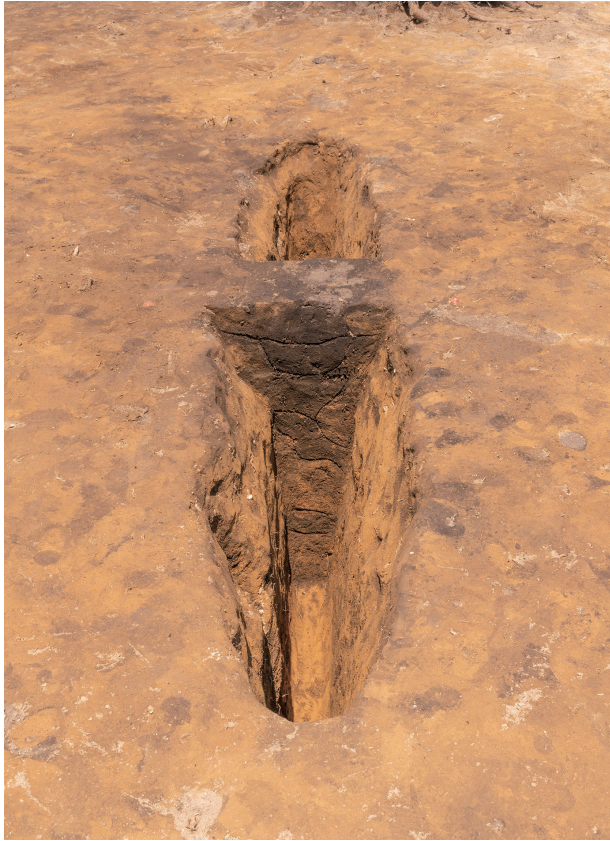


第43号溝状土坑 土層(南→)



第43号溝状土坑 完掘(南→)

写真4 作業状況・溝状土坑(1)



第44号溝状土坑 土層(南→)



第44号溝状土坑 完掘(南→)



第45号溝状土坑 土層(南西→)



第45号溝状土坑 完掘(南西→)

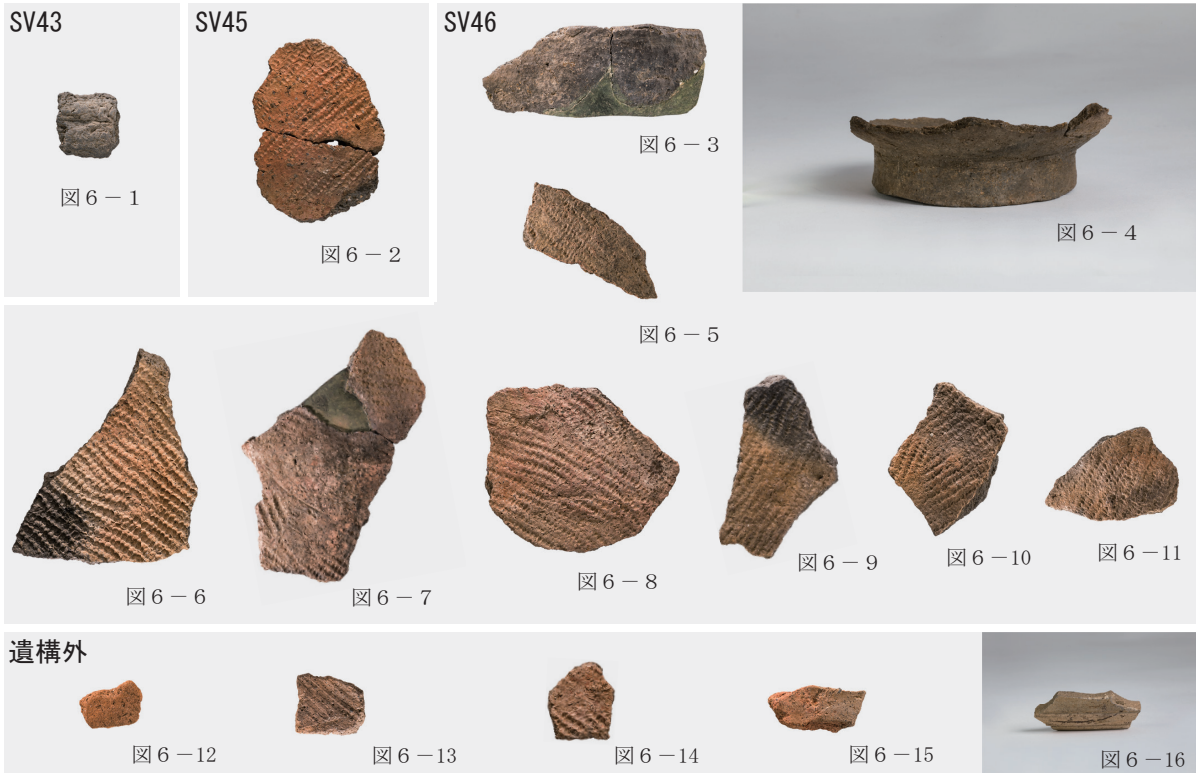
写真5 溝状土坑(2)



第46号溝状土坑 土層(南東→)



第46号溝状土坑 完掘(南東→)



出土遺物

写真6 溝状土坑(3)・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はやしのわきいせきさん							
書名	林ノ脇遺跡Ⅲ							
副書名	道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第634集							
編著者名	平山 明寿 小田川 哲彦							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2023年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
はやしのわきいせき 林ノ脇遺跡	あおもりけん 青森県 かみきたぐん 上北郡 よこはままち 横浜町 あざはやしのわき 字林ノ脇	02406	406018	41° 05′ 01″	141° 15′ 28″	20210511 ～ 20210630	1.500	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
林ノ脇遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代 平安時代 近世以降	溝状土坑	4	縄文土器 土師器 陶器			
要約	<p>林ノ脇遺跡は、道の駅よこはまの東隣、三保川右岸の標高25～27mの段丘上に立地し、遺跡の南端は三保川の谷底平野に臨む急崖となっている。令和元年度に当センターが発掘調査を行っており（2019年度調査）、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の竪穴建物跡を多数検出した。</p> <p>本事業の調査区は2019年度調査区の北西に位置し、調査の結果、縄文時代の溝状土坑を検出した。また、縄文時代の土器・平安時代の土師器・近世以降の陶器が出土した。</p> <p>今回の調査から、縄文時代の狩猟場は三保川に面した遺跡南端のみでなく、遺跡北半にも広がっていたことが判明した。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第634集

林ノ脇遺跡Ⅲ

—道の駅よこはまエリア地域創生拠点事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2023年3月15日
発 行 青森県教育委員会
発 行 者 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL. 017-788-5701 FAX. 017-788-5702
印 刷 長尾印刷株式会社
〒030-0931 青森県青森市平新田字森越17-1
TEL. 017-726-7121 FAX. 017-726-9237

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部当たり1,870円（うち県負担698円）です。